

## 天寿国繡帳の原形と画題について

大阪大学大学院文学研究科 三田覚之

現在、天寿国繡帳(以下繡帳)は七世紀の原本(原繡帳)と建治元年(一二七五)に制作された模本(新繡帳)の断片を台紙上に貼付けた状態で保存されている。これは安永年間の修理によるもので、当初の図像配置はほとんど伝えられていない。繡帳は本来どのような姿であったのか。本発表では刺繡下地裂に注目することで、作品の原形について考察する。

繡帳断片の図像方向には、現状において多くの誤りがある。これは刺繡下地裂の織糸方向によって知られ、さらに図像と下地裂との関係が新旧の繡帳で異なっていることも認められる。すなわち、原繡帳は全ての下地裂を縦使いしているのに対し、新繡帳は図像によって裂方向を変えているのである。このため、新繡帳に関しては、裂使いを整理することで、画面における下地裂構成を復原することが可能となる。裂方向の使い分けは、合理的に刺繡作業を行うための措置と見られ、横長の図像が占める部位は、下地裂も横使いされている。画面の上辺に白平絹を下地とした外区を配し、紫綾を下地とする内区の底辺に蓮池を表すという画面が、新繡帳本来の構成であったと想定される。これは原繡帳と同じ構成であると見られ、繡帳を復元的に考える上で参考となる。

また本発表では、文献に記された図像や現存の断片を検討することで、繡帳の画題について考察する。『太子曼荼羅講式』、また『聖徳太子伝記』の記述から、繡帳の中心図像は「四重宮殿」であったと想定され、その左右には現存する鐘堂などの図が配されていたと思われる。従来、繡帳の中心図像としては尊像が想定されてきたが、その存在については文献中に記載がなく、また少なくとも現存断片中に認めることはできない。

では、「四重宮殿」の意味する浄土とは何処だろうか。重松明久氏が指摘されたように繡帳外区に見られる老人像は弥勒の下生を説いた『弥勒大成仏経』に基づくものと考えられ、他の外区図像も同経によって解釈することが可能である。よって、外区は『弥勒大成仏経』を表すものであったと思われるが、そうとすれば、対する内区浄土図の宮殿は『弥勒上生兜率天経』に基づく兜率天宮であった可能性がある。これにより、繡帳内区の浄土は兜率天であり、作品は全体として弥勒菩薩の上生と下生を表していたものと想定する。

また補足として、本発表では繡帳における亀甲銘文の配置についても新たに一案を示したい。繡帳を本来の用途として牀台に掛け回した場合、その中央である開閉部分を挟むように、聖徳太子およびその母と妃の名を記した部分が位置することを指摘したいと思う。